

創立二十周年の記念号に寄せて

京都府立大学長 小堀 憲

二〇年という歳月は、これを人間にたとえても、この間に、幼児が成年に達するのであるから、決して短いものではない。だから、それを記念して、紀要の特別号を公刊することは、大いに意義のある事業である、といえるのではなからうか。

本学も、昭和二四年に、「西京大学」という名のもとで出発したときには、真の意味の大学とはほど遠い状態であった、と聞かされている。それが、京都府と大学人との強い協力と努力とによって、着々と発展し、一〇年間のひたむきな前進によって、「京都府立大学」へと成長したのである。それを記念するために、この紀要の特別号が公刊されているが、この巻頭に、当時の学長であった近藤金助博士は、『研究への施設は貧弱であり、研究への諸経費は窮乏していたにもかかわらず、よくもこれだけの成果をあげ得たことであると思う』と、本学の教員の研究意欲が旺盛であり、その研究へ傾けた情熱の激しさを、ほめたたえておられる。

それから、また、一〇年を経過した。この間に、京都府は、施設の充実や研究費の増額などを、大幅にやってくれた。本学の教職員も一丸と

なって、大学の使命である教育と研究の向上に、全力を傾けてきた。本学の社会的地位を高めるために、精根の限りをつくしてきた。さらに、学界における本学の地位を高めるために、研究へ！ 研究へ！ と、夜を日に継いで、努力を重ねてきた。

しかし、この一〇年は、本学にとっては、平穩なものであった、とはいえないであろう。ことに第一〇年目の年は、わが国の「大学史」における疾風怒濤時代とでもいうべき時代と重なっている。大学はこの怒濤逆まく狂乱の海で、舵を取られないようにするのに、精一杯である。教員は、大学における教育と研究とを守護するために、全力を傾けている。そのかたわら、研究への情熱をかきたてて、血を吐く思いを続けながら、研究へ邁進しているのである。

このように考えてくると、この記念号は、本学二〇年の歴史の成果を示すだけではなく、新しい大学への出発点を示す記念碑ともなるべきものである、といえるのではなからうか。ここに集められたものは、それぞれの研究者の精進の成果を示す珠玉であって、これを完成した一人一人が、ホラチウスにあやかって、*Exegi monumentum aere perennis*

(わたしは、青銅よりも永く残る記念碑を打ちたてた)と心の中で誇っていることであろうと思う。

これらの業績が、学界の各方面から、高い評価を与えられ、これがつぎの時代への踏み台となって、本学の学問的伝統の礎となるであろう、と心強く思いながら、この記念号を、学界へ捧げる次第である。